

○深川で家臣・百姓らと芝居見物

十一月十六日 日和

(前略) 今日ハ

(重遊)
殿様其外上々様方芝居被遊

上覧候付、(当役毛利就盛)駿河殿を始其外末々迄、

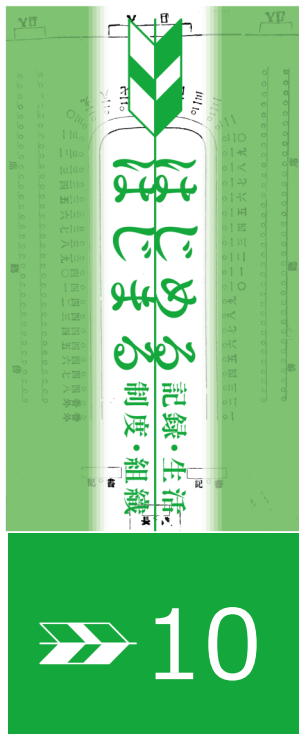
且所居相之百姓迄えも見物被仰付、

昼九ツ時頃方始り、夜二入五ツ半時頃漸

満候事

殿様・上々様方御機嫌能御上り被遊

候事



制度 ③

「深川御入湯日帳」より安永3年（1774）11月16日条（毛利家文庫6巡見事47）

萩藩主重就、領内巡見「はじめる」

(2)

《藩主時代の巡見》

重就は萩藩主の座にあった宝暦元～天明2年(1751～82)の32年間で計8回巡見に出ています。以下概要を紹介します（各記録の請求番号はシート9参照）。

①宝暦2年「深川御湯治沙汰控」

宝暦2年(1752)6月1日初入国した重就による初巡見です。10月21日萩を発ち、深川の御茶屋（現長門市）に到着。以後同所に滞在し、翌月12日萩に帰るまでの21日間でした。この間、正明市、三ノ瀬（現長門市）などで狩りをしたり、瀬戸崎で捕鯨を観ています。11月2日は「三隅豊原神事踊り」を上覧、5日は孝行人2人、高寿者5人に御目通りを許し褒美に米銀を下賜しています。

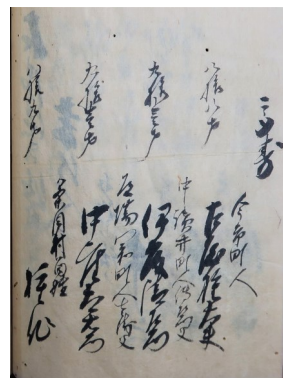
②同4年「山口御湯治沙汰控」他

宝暦4年4月帰国した重就は、9～10月山口・小郡方面を巡見します。9月22日萩を発ち、同日山口御茶屋着。翌日

から平蓮寺で鷹狩、長者山での茸狩（松茸狩り）、山口諸寺社の拝謁などの後、25日「はじめて」湯田で入湯しました。26日小郡へ行き、29日まで同御茶屋に滞在、狩りに興じています。29日山口に戻ると、禅昌寺や朝田での狩り、高嶺登山、吉敷の瀧見物などのほか、5日には「祇園祭礼之節之踊」（祇園祭の鷺舞）を上覧、8日地域の孝行人・高寿者に御目通りを許し米銀を下賜しています。12日、警護などを務めた在郷諸士たちに御目通りを許して労をねぎらい、萩へ戻りました。全20日間。随行は73名ほどでした。

③同6年「阿武郡辺御歩行沙汰控」他

宝暦6年5月23日に帰国した重就は、10月21日～11月6日に阿武郡生雲・徳佐で狩りに興じています（15日間）。狩りで同地を訪れた藩主は重就だけです。生雲本陣は庄屋大谷忠左衛門宅、徳佐本陣は椿九兵衛宅でした。帰萩前



孝行人・高寿者への褒賞

藩主巡見時には地域の孝行人や高齢者への褒賞イベントがつきものでした。宝暦4年の山口巡見の場合、10月8日に孝行人3名、高齢者10名に御目通りを許し、前者に米1俵、後者に銀3両を下賜しています。高齢者は80～90才代（最高齢は96才）。重就は彼らに、「何か古いことを覚えておらぬか？」と尋ねています（毛利家文庫6巡見事40）。

日の5日、奥阿武宰判内の孝行人1名・高寿者4名へ褒賞の米銀を下賜しています。

④明和3年「山口・宮市・小郡御越之記」

宝暦11～14年(1761～64)に実施した宝暦検地の影響か、③以降10年ほどは巡見はありませんでしたが、明和3年(1766)9～10月、重就は山口・宮市・小郡へ出向きます。久しぶりの巡見です。

9月28日重就は澄姫（6女）と長屋様（側室）を伴い萩を発ち山口御茶屋へ。湯田での湯治、小鯖での猪狩り、長者山での松茸狩り、寺社参詣、吉敷の瀧見物、「天神踊り」見物などで過ごしています。

10月14日重就は防府宮市へ足を延ばし、16日天神祭りを見物。18日宮市を発ち、鷹狩をしながら小郡御茶屋へ。小郡滞在中は水車や「百間口」を見物。22日小郡を発ち山口に戻り、その夜は山口の「子とも踊（子供踊り）」を上覧しています。23日、山口を発ち萩に戻りました（30日間）。

⑤安永2年「深川御入湯之記」

⑥安永3年「深川御入湯日帳」

重就は安永2年(1773)2月、翌3年11月と続けて深川へ出かけています。2年時は澄姫と長屋様、3年時は「上々様方」（側室たち）を伴いました。

安永2年は2月1日に萩発、同日深川御茶屋着。以後、大寧寺参詣、四ノ瀬、青海島などで狩り、鷹狩、瀬戸崎で捕鯨見学、黄波戸浦で「かづら網」見学のほか、「三隅踊り」「正明市祭礼おどり」なども上覧しました。19・20日は重就が「お忍にて」（当役のみ随伴）深川の山を歩き、18日には澄姫も瀬戸崎を散策しています。28日帰萩。計28日間。

翌3年11月2日萩発、深川着。以後、大寧寺参詣、三ノ瀬、正明市への歩行、芝居見物、「先大津おどり」の上覧、加えて仙崎周辺の孝行人・高寿者の御目通りを許し、褒賞しています。15日、澄姫は「真のお忍び」（まったくの隠密行動）で「子共芝居」を見物しています。なお、9日掛淵浦に漂着した朝鮮人漁船があり、24日重就が仙崎でこの船を視察しています。30日帰萩。計29日間。

ちなみにこの巡見以前、明和6年(1769)には萩城天守の大修築、同7年は元就200回忌法要、8年は嫡子治親と御三卿田安宗武娘の婚儀、安永元年は江戸藩邸焼失と年々膨大な出費が続いていました。

⑦同5年「三田尻御越之記」

安永5年11～12月、山口・三田尻・小郡を巡見しています。雅姫（長姫・9女）と「上々様方」（側室長屋様・於千三様）も同行します。11月10日萩を発ち山口で一泊後、11日三田尻へ。以後翌月1日まで重就は、御船倉、天満宮、羅漢寺、国分寺、阿弥陀寺、西の浦、大崎などを訪れ、27日は郡司家で鐘鑄造作業を視察。この間3日ほど鷹狩にも興じています。姫様や側室たちは中関で芝居を見物したり、御茶屋で宮市祭礼時の踊りを上覧しています。12月1日重就は小郡へ。鷹狩のためです。3日小郡を発ち山口へ（姫様たちは3日まで三田尻滞在、同日山口へ）。5日「山口市中之踊」を御茶屋で上覧、6日名田島の高齢夫婦に御茶屋で御目通りを許し、米銭・金を下賜。7日瑠璃光寺参詣。8日帰萩、計29日間の巡見でした。

⑧同8年「三田尻御越之記」

安永7年(1778)9月21日に萩に帰城した重就は、10月12日、藩財政窮迫のため家臣へ10年間の半知（禄高半分の収公、藩への召し上げ）を命じました。ところが、年明け1月15～20日の6日間、重就は萩を発ち三田尻に滞在します。鷹狩のためでした。家臣へ半知を命じる一方、鷹狩に興じる重就。家臣の批判も強かったでしょう（参照：『山口県史だより』第33号「馳走米－藩士の視点－」）。

《巡見する藩主重就》

藩主時代の重就は、深川方面3回、山口・三田尻・小郡方面4回、生雲・徳佐方面1回出向いています。狩り、湯治、寺社参詣、名所見物、「御忍び」の歩行など、保養・レジャー（息抜き）の意味が強かったことはもちろんです。一方、各地の孝行人・高寿者への褒賞イベントなど、領民に藩主の威光を示し、善政を印象付ける場、政治的ショーとしても利用されています。各地で祭礼踊りや子供踊りを鑑賞しているのも興味深い点です。庶民芸能にも関心を示し、それを愛でる親しみある藩主の姿勢をアピールできたのではないのでしょうか。

一方この時期、藩財政的には、膨大な出費が強いられた出来事が続き、家臣たちに半知を強いていました。そうした状況下、藩主の度重なる巡見に対しては、家臣たちからきびしい目が向けられていたことでしょう。